たうんとぴっくす TOWN TOPICS

まちの話題や出来事を紹介します

市長日記

尼子フェス始動

5年に1度の大イベント「全国尼子一族大集会及び戦国尼子フェスティバル」が、令和5年10月21・22日の2日間、行われます。

同実行委員会の平原金造会長らが市役所を訪問し、イベント開催に向け、同実行委員会の立ち上げ報告と協力要請の依頼がありました。月山富田城跡や尼子一族の魅力を発信する機会です。ともに盛り上げていきましょう。

◀勝ちどきを上げる同実行委員会の皆さんと田中市長（10月5日）。

このマークの記事は、関連写真を「市公式フェイスブック」で公開しています。

今月の1枚

三の丸の石垣が照らされた月山富田城跡のライトアップ。安来市商工会が地域づくり支援事業補助金を利用し実施しました。月山富田城跡の文化財としての価値観の再認識と誘客につなげることを目的としています。　9月23日～10月14日：月山富田城跡

たたらの伝統技法復元

▲砂鉄を1回ごとに計量し、炉の中に装入する参加者。約40kgの鋼（けら）ができあがりました。

古来の製鉄法の普及啓発につなげようと、10月6日～8日の3日間かけて、3年ぶりに「古代たたら復元操業」を和鋼博物館で行いました。

今回の操業に初めて一般者も参加。県内外から約70人が訪れました。日刀保たたら村下（むらげ）で、国選定保存技術保持者の木原明さんらの直接指導を受けながら、古来の製鉄法について学んでいました。

松江市から親子で参加した高橋光さんは「モノづくりの原点を直接肌で感じることができ、貴重な体験をすることができました」と話していました。

秋満喫のきのこ狩り

自然に囲まれながら秋の1日を楽しんでもらおうと、10月8日に山佐ダム体験交流施設「やまびこ」で、きのこ狩りの集いが行われました。市内外から訪れた56人の参加者は案内人と共に山林へ。終了時間には様々な種類のきのこが集まりました。食べられるものは持ち帰ることができ、参加者は一喜一憂しながらきのこの鑑定を見つめていました。

きのこ狩り初体験の古志麟太郎さんは「山が思っていたより険しくて登るのが大変でしたが、きのこを採るのが楽しかったです」と話していました。

▲収穫したきのこは「全国森林インストラクターしまね」のきのこアドバイザーが鑑定しました。

地域へ感謝を込めて

▲ステージイベントトップバッターはみゆきこども園。13の団体がステージを盛り上げました。

令和３年10月に開局10周年を迎えたやすぎどじょっこテレビ。地域の活性化・市民が笑顔になるイベントを提供しようと、10月10日にアルテピア駐車場でどじょっこ祭が開催されました。子どもたちの発表などのステージイベント、16の飲食ブースと12のフリマブースの出店などが行われ、多くの人で賑わいました。

ステージ発表を行うJr.HIPHOPの大和美月さんは「久しぶりのステージ発表で緊張しますが頑張ります」と話していました。

「ハナミズキ」が絵本に

10月15日に「子どもの本つ～ぼ」で、バイリンガル絵本「ハナミズキ　A Hundred Years」の出版を記念した講演会が開催されました。講演会では作画を担当した安来市在住のねっこかなこさんと、英訳の世界的詩人アーサー・ビナードさんが絵本の朗読、制作秘話、ラフ画などを披露しました。

歌手の一青窈（ひとと よう）さんの名曲「ハナミズキ」に英訳の歌詞を、という話をきっかけにできたこの絵本。一青さんが詩に込めた想いからイメージを膨らませてできた、反戦と平和を祈る１冊となっています。

▲作品が出来上がるまでのエピソードを語るねっこさん（右）とアーサーさん（左）。

自分の力を再確認

自分の体力を知ることで運動するきっかけや健康づくりにつなげてもらおうと、「第２回安来市体力測定会」を10月１日に伯太体育館で開催しました。

測定会は、年齢区分（６歳～64歳対象と65歳～79歳対象）ごとに異なる６種類のテスト項目を実施。６歳～64歳を対象としたテスト項目では「反復横跳び」や「立ち幅跳び」などを行いました。

南小５年生の森本希さんは「自分の今の体力を再確認できました。記録を更新できるよう、普段から運動をするようにしていきたい」と話していました。

▲反復横跳びをする参加者。各種目の合計得点を基に５段階（Ａ～Ｅ）で評価されました。

災害に万全な備えを

▲協定書を持つ田中市長（左）と日本福祉用具供給協会の生本中国支部長（右）。

市と一般社団法人日本福祉用具供給協会は、10月４日に災害時における福祉用具等物資の供給等に関する協定を締結しました。同協会は福祉用具供給に関する広域社団法人で、安来市は山陰初の災害協定締結自治体となります。

この協定により、災害時にベッドやマットレスといった福祉用具等の物資を迅速に避難所などへ供給できるようになります。同協会の生本覚中国支部長は「市と協会がお互いに協力し合い活動を進めていきたい」と話していました。